小正月の夜に来訪する裸の神々—宮城県加美町柳沢

森　　隆　男

1　はじめに

東日本に伝承されている小正月の行事は多様である。火や水の要素が関わる儀礼に成人儀礼が重なり、複雑な様相を見せる。

2000年の夏に宮城県加美町柳沢を訪れた際、当地の吉岡茂氏（1922年生まれ）から小正月に行われる「焼け八幡」と呼ばれる行事について聞き書きをする機会があった。小正月の火祭りと通過儀礼、さらに来訪神の信仰が複合したものである。2010年の１月に行事を見学することができ、この10年間に一部の変更が行なわれたが、今なお地域の重要な行事として続けられていることを実感した。

2　焼け八幡の概要

柳沢地区は戸数約40の農村である。氏神の八幡神社は、集落を見下ろす山の中腹に鎮座しており、蛇行した参道が設けられている。１月14日（今年は１月16日）の午後、子供たちは各家から稲藁や竹を集め、八幡神社境内に運ぶ。その日の夕方に20歳から40歳までの男性であるワカモノたちは、それらの材料を使用してオコヤと呼ばれる小屋を建てる。子

写真１　土足で住まいに入ってくるワカモノ

写真２　ヘソビをつけられる女性

供たちは小型のホマチゴヤを作る。また12束（閏年は13束）の藁を編み上げて約３メートルの長さのトウロウを作り、境内の木に吊るす。日没前にトウロウに火が点けられ、その燃え方で豊凶を占う。続いてホマチゴヤに点火し、子供たちの健康を願う。

翌15日の午前２時ごろ、ワカモノたちは宿（現在は集会所）に集まり、酒を飲み始める。本年の参加者は19人であった。午前４時ごろ、リーダーのワカモノオサの指示でワカモノたちは下着１枚（かつては褌）になり、草鞋を履いて八幡神社に駆け上る。この時、無病息災や火難よけ、豊作を祈願する。その後２人１組で酒の入った手桶を持ち、２組ですべての家々を回る。彼らは「ヨイサ、ヨイサ」と掛け声をかけながら雪の中を走り、「当たらせ」と言って草鞋を履いたまま住まいの居間に入ってくる。「当たらせ」とは火の接待を要求する言葉である。家の主人は囲炉裏のヨコザ

写真３　燃えあがるオコヤ

で待ち、ワカモノから手桶の酒を受ける。また、その家の女性たちの顔に、囲炉裏の鍋などについたヘソビと呼ばれる墨がつけられる。囲炉裏がほとんど消滅した今は庭先で藁を燃やし、その灰を塗る。

午前６時ごろには村中の家を回り終わり、ワカモノは八幡神社の境内に戻ってくる。再度参拝したあとオコヤに火が点けられ、村の人びとはオコヤが崩れ落ちるまで見守る。その際、オコヤの燃え具合や煙のたなびき具合でその年の豊凶を占う。

３　行事を構成する要素

八幡神社は集落から見える山の中腹にあり、15日の未明にそこから裸で駆け下りて集落内の住まいを訪れるワカモノの姿に、村人は神が来訪する情景を重ねている。手桶の酒を振る舞い、福をもたらす小正月の来訪神である。ヘソビも神が授ける祝福の一つであろう。土足で住まいに上がりこむことが許されるのは、神の資格といえる。

ここで留意したいのは神社の境内に造られるオコヤである。単なる小屋ではなく「御小屋」で、「御」は神と関わる宗教施設であることを示している。オコヤは間口3.3メートル、奥行５メートル、高さ3.2メートルの規模があり、土間に藁を敷いている。ワカモノが宿で酒を飲み始めるころ、かつては村の長老のトシオサもオコヤに籠って酒を飲んだと伝承されている。司祭者が神祭りの資格を得るために物忌みに使用した施設であった可能性が高い。そしてワカモノの一連の行動とオコヤの規模からみて、ワカモノもまたここに籠り神に変身する場であったと考えられる。それが燃やされることでワカモノは人に戻り、行事が終わったことが確認されるのであろう。14日に燃やされるホマチゴヤと15日に燃やされるオコヤの燃え具合から、その年の豊凶を占うとしている点は、全国的にみられる年頭の占いと共通する。

今年から参加した３人には先輩たちから何度も盃がすすめられた。かつては盃を置くことが許されなかったという。新しく養子にきた人も同様であった。「ヨイサー」の掛け声とともに飲み干すが、約２時間全員正座のままであり、これが儀礼であることを示している。雪の中を走り回る行為も含めて、ワカモノには体力と精神力が求められる大きな試練であり、成人儀礼といえよう。試練を経て、村を支える構成員として認められることになる。また訪れた家々で顔に墨をつける対象は、かつては新婚の嫁であった。これは真っ黒になるまで働けという意味があるというが、「これで村の人として認めてもらえた」という証言があるように、加入儀礼の一つであった。

４　村の秩序を確認する行事

この行事に対する村の人びとの思いは強い。ふだんは町に出て生活をしている人も、帰省してこの行事に参加する。そこには自分が村人の一員であることを確認するとともに、すべての家を訪問することで、それぞれの家の構成員など村の状況を理解する機会になる。

一方、山の中腹に設定された氏神は、村の聖地である。そこから毎年年頭に神が来訪し、祝福して帰っていく儀礼は、神と人の秩序を空間的に確認する機会でもある。神に扮するワカモノと炎に包まれるオコヤが、村人に強烈な印象を与える。演劇的に構成された「焼け八幡」には豊かな民俗信仰をみることができ、まさにこの行事は貴重な文化遺産といえよう。

関西大学文学部教授